

浅間火山北麓の2万5000分の1地質図

Geological Map of the Northern Part of Asama Volcano 1:25,000

地表をつくっている地層を見分けて塗り分けた地図が地質図である。火山の場合は、大きな噴火のたびに溶岩や火山灰が山麓の地表を流れ広がるから、それを現地で見分けてつくつ。

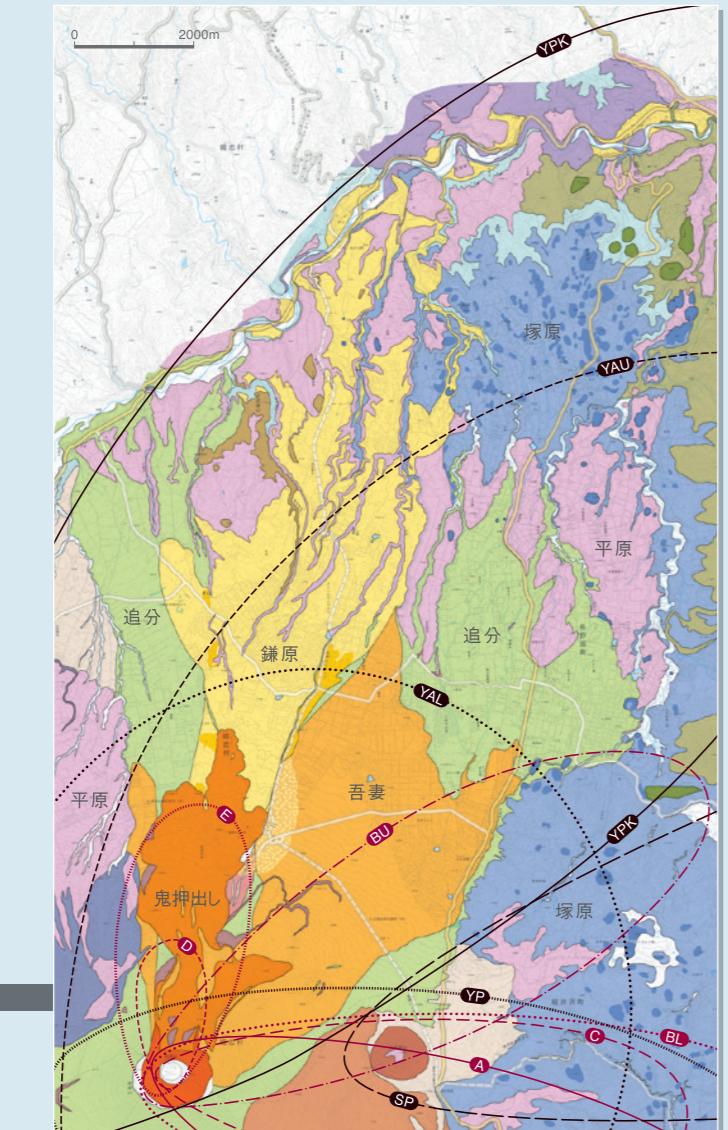
浅間山の北麓は、次の6種類の地層でおおむね塗り分けることができる：江戸時代の1783年（天明三年）噴火で流れ出した（1）鬼押出し溶岩（2）吾妻火碎流（3）鎌原土石なだれ、平安時代の1108年噴火で流れ出した（4）追分火碎流、1万5800年前の噴火で流れ出した（5）平原火碎流、2万4300年前の山体崩壊で山麓に広がった（6）鎌原土石なだれ。表面に印刷した地質図には、これらより小さな噴火で生じた地層や浅間山ができる前からあった地層も表現してある。

この地質図をじっくり読み込むと、浅間山が誕生して以来現在までたどった噴火や崩壊の歴史を詳しく知ることができる。火山の噴火や崩壊は、その地域に居住するひとにとっては災厄だから、なるべくなら考えたくないかもしれない。しかし浅間山はいまも山頂火口から煙を吐き出す活火山である。この先、いつかはわからぬが、かならず噴火する。噴火の危機が迫ったとき、災厄からうまく逃れるためにはその火山の過去の事例を知っていることが大きな助けになる。だから、いままでこの地質図をよく読んで浅間山の成り立ちを知ってほしい。

浅間北麓は六千里ヶ原と呼ばれる。広い空の下に展開するこの高原は、浅間山が過去に何度も大噴火したからこそ生まれた。火碎流や土石なだれが浅間山から大量の土砂を山麓に運んで、表面の起伏をつくり立てて平坦にした。なかでも大畠や北軒井沢は、生まれてからまだ900年しか経っていない若い土地である。いまここに集落を形成し、農地を耕すことができるのには、まったく浅間山のおかげであることを忘れてはならない。

噴火のときに空から降った軽石や火山灰

記号	噴火年月日	M	特徴
A	1783年8月4日	4.5	白色の軽石
BU	1108年8月26日	4.5	黒と白の織模様が顯著な軽石
BL	1108年8月29日	4.8	黒い軽石（スコリア）
C	3世紀末	4.4	淡黄色の軽石
D	5860年前	3.1	淡黄色の軽石
E	6730年前	3.7	ウグイ色の火山灰を挟むスコリア
YAU	1万5800年前	6.0	カラフルな火山灰が織模様をなす
YPK（爆巣）	1万5800年前	5.6	黄色の軽石
YAL	1万5800年前	5.4	カラフルな火山灰が織模様をなす
YP	1万5800年前	5.3	黄色の軽石
SP（白糞）	2万0800年前	5.3	黄色の軽石。角閃石を含む



地質図から読み取る過去の大噴火

1783年（天明三年）の噴火

赤色～黄色系統で表現した鬼押出し溶岩 [A1]、吾妻火碎流 [Aig]、鎌原土石なだれ [Aid]、鎌原熱雲 [Aht]、そして金山スコリア丘 [Aet] がわかる。

鬼押出し溶岩と吾妻火碎流は山頂火口から流出した。この二つの流れが火口の南側（長野県側）には流れ下らない北側（群馬県側）にだけ流れ下ったのは、当時の山頂火口の縁を傾いていたからである。二つの流れは、もっと低い北側の縁からあふれ出た。

吾妻火碎流は、先駆して斜面を下流していた鬼押出し溶岩の高まりに行き手を妨げられ、東西に分断して山腹を流れ下った。火山博物館に併設されたスキーランドとその上部斜面には吾妻火碎流が分布しない。そのにある鬼押出し溶岩が斜面を下流する上には吾妻火碎流が乗っている。また、山頂に近い標高2400m付近の鬼押出し溶岩の上にも吾妻火碎流が乗っている。

六里ヶ原の西部を占める上下二枚の舞台溶岩や、鬼押出しの西側にわずかに露出する前掛山の溶岩は、実際には吾妻火碎流にすっかり覆われたが、地質図では急崩部だけを溶岩の色で塗って表現している。吾妻火碎流は火口縁から北へ8.4km流れ下った。

鎌原土石なだれは、山頂からではなく鬼押出し溶岩の先端から発生した。柳井沼という湿地で鬼押出し溶岩が覆ったことによって激しい水蒸気爆発が起り、鎌原熱雲が発生した。火山博物館付近に1m以上の厚さで堆積しているガラス光沢をもつ青黒色の砂礫がそれである。

この爆発と同時に大量の表層土砂が動き出していっせいに北へ流れ下り、北に開いたU字型の凹地が爆発源に生じた。土砂は土石なだれとなって三原まで11kmの距離を高速で直線的に進んだ。そこからは吾妻川に沿って向こうに変えて、吾妻川までの段丘によって、小さな流れ山がたくさん残っている。地質図にはそれらのうち特別大きなものだけを濃色で表現している。鎌原觀音堂は、向原アトの三ヶ所には、この土石なだれの通過から免れた領域であるキブカが認められる。

この爆発と同時に大量的表層土砂が動き出していっせいに北へ流れ下り、北に開いたU字型の凹地が爆発源に生じた。土砂は土石なだれとなって三原まで11kmの距離を高速で直線的に進んだ。そこからは吾妻川に沿って向こうに変えて、吾妻川までの段丘によって、小さな流れ山がたくさん残っている。地質図にはそれらのうち特別大きなものだけを濃色で表現している。鎌原觀音堂は、向原アトの三ヶ所には、この土石なだれの通過から免れた領域であるキブカが認められる。

2万5000年前の噴火

ピンク色で表現した平原火碎流 [Hig] が火山中心から四方八方に流れ広がり、堆積物が谷を埋めて山麓に広い平坦面が生じた。火碎流は黒斑や仏岩の山体の上にも通じたから、そこにも薄い堆積物が残った。それは急斜面で覆われた。平原火碎流は東西に分断して、火山博物館に併設されたスキーランドとその上部斜面には吾妻火碎流が分布しない。

吾妻火碎流は、先駆して斜面を下流していた鬼押出し溶岩の高まりに行き手を妨げられ、東西に分断して山腹を流れ下った。火山博物館に併設されたスキーランドとその上部斜面には吾妻火碎流が分布しない。

吾妻火碎流は、先駆して斜面を下流していた鬼押出し溶岩の高まりに行き手を妨げられ、東西に分断して山腹を流れ下った。火山博物館に併設されたスキーランドとその上部斜